

# バンドヒーローZ

春夏の渴き

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

バードヒーロー外伝×ウルトラマンZ

# 目次

第八話 神秘なる強さ

あらすじ・登場人物・用語集（随時追加修	
正・スキップ可）	1
第一話 ご唱和お願いします、私の名前	13
を！	13
第二話 戦士の真髄	19
第三話 「LIVE」 怪獣輸送	27
第四話 式号機発進プロジェクト	32
第五話 暗躍の始まり	36
第六話 帰ってきた戦士たち	41
第七話 ヴェリガのライズソウル	44



## あらすじ・登場人物・用語集（随時追加修正・スキップ可）

くあらすじく

時は第四次デスモストラグルの真つ只中、それはオリトバースとデスモバースと称される二つの宇宙で激化する戦乱の時代であることを意味する。かつて宇宙中に拡散した小型新太陽を怪獣達が吸収したせいも、世界は更に混乱に陥れられていた。

平和を取り戻すべく宇宙の守護者であるバラディアン及びバーンドヒーローたちが宇宙中で戦うかたわら、この小型新太陽のカケラを悪用して次々に惑星を滅ぼす謎の存在が卑劣な暗躍を続けていた。そしてその魔の手が、ついにオリトバースの「地球」に迫る。

颯爽と立ち向かうバラディアンの戦士レイヤノと、その弟子・ゼステイ！ 激戦の末、ゼステイは一人で怪獣を追い、地球へと向かう――。

一方、デスモバースの地球では、第三・五次デスモストラグルを経験した影響で、日常的に出現する怪獣、異星人に対抗するための防衛軍が組織されていた。対怪獣ロボット部隊「ストレイジ」。そしてそこには若き熱血漢・ナツカワ ハルキが所属していた。

地球に宇宙怪獣が襲来したその時、ゼステイとハルキは運命の出会いを果たす。ここに、若き二人の熱血バトルストーリーが幕を開けるのであった！

〈時系列〉

バラディアン第四世代・オリト、デスモ西暦2222年以降

〈用語〉

オリトバース、デスモバース

・ ・ ・ 合わせ鏡のように深く結び繋がれた二つの可能性世界。オリトバースには超能力を持つて宇宙の均衡を守る地球人の戦士・バラディアンが存在する空想科学世界。デスモバースは我々と似たような現実科学世界である。

小型新太陽

・ ・ ・ オリトバースの地球の中心地に存在する人工太陽。この小型新太陽の洗礼を受けることで宇宙の守護者・バラディアンとして超能力を身に付けることができる。

第四次デスモストラグル

・ ・ ・ オリトバースとデスモバースが再び交わった宇宙戦争。前回二つの世界が交わり勃発した宇宙戦争、第三・五次を経験したデスモバースの地球は、日常的に出現する

怪獣、異星人に対抗するための防衛軍が組織を結成することとなる。また、この第四次ではオリトバースが持つ小型新太陽が爆発、宇宙中に拡散されてしまった。

### ジュゼーレフラグメンツ

・・・かつて宇宙中に飛び散ったとされる、小型新太陽の破片。代替用に開発されたレイエネルギーによりオリトバースは最悪の事態は免れたが、今なお全宇宙を大混乱に陥れているとされる。謎の存在がこれを悪用し、怪獣の暴走や惑星の壊滅といった卑劣な暗躍を続けているという。

### バラディアン

・・・オリト人（オリトバースの文明人）が「オリジン・トライ・マインド」で持ち得る固有の超能力を使用して宇宙の均衡を守る戦士／守護者。飛行・驚異的な身体能力・巨大化・テレポーテーション、寿命が物凄く緩やかに広がる等と、小型新太陽の洗礼を受けた様々な超能力を日常的に使える。

特に注目すべきは戦闘時一度しか使えない必殺技・「ラストジャツジ」。バラディアン各々が持つ特徴的な「固有武器」ユニークウェポン。

世代があり、継げば継ぐほど強いポテンシャルを秘めた戦士が現れやすい傾向がある。戦争ごとに区切られており、後述するゼステイは第四世代である。

また、バラディアンはデスマバースに適さない質自体が異なる存在であるため相性が

非常に悪い。そのため長時間デスマバースの世界で存在を維持することが非常に難しい。その際の戦闘活動可能時間は7分。但し、神社や寺、教会などの神聖な場所はオリトバースと繋がりやすい影響があるため、そこなどでは存在を維持することがかろうじて可能。

### 守護快獣

・・・バラディアンが使役することができる味方の怪獣を召喚する。ウルトラマンでいうところのレイオニクスのな力をバラディアンは持っているのだ。普段はジュゼーレタイマー・エネルギーの中に封じ込められている。

### バーンドヒーロー

・・・オリト人であるバラディアンとデスマ人（デスマバースの文明人）の選ばれし者が絆を繋げることで誕生するスーパーヒーロー。完全融合すると、身も心も記憶も力も全て同一の存在と化す。どっちに似るかは分からない。『インティグレート』（融合）する際や、活動時間や体力を知らせる宝石・『ジュゼーレタイマー・エネルギー』が減ったり時間が近づくと黒く穢れていく。

通常時、バラディアンは『投影』して同化先の人間とコミュニケーションを取る（ウルトラマンタイガのイメージ体のようなもの）投影状態では基本30%なら具現化、現実世界への干渉が可能である。



## ストレイジ

・・・上述した第三・五次を経験したデスマバースの地球が、日常的に出現する怪獣、異星人に対抗するための均衡軍が結成した組織。地球均衡隊日本支部（GAFJ）の対怪獣ロボット部隊。創設者は日本支部長官のクリヤマ。

正式名称は『対怪獣特殊空挺機甲隊』、英語表記は『STORAGE (Special Tactical Operations Regimental Airborne and Ground Equipment)』。

『対怪獣特殊空挺機甲』(通称特空機)という巨大ロボットを駆使し、怪獣が巻き起こす災害に立ち向かう。

他国の地球均衡軍支部では航空戦力が充実しているが、地球均衡軍でロボットを保有しているのはこのストレイジのみ。また、部隊にはもAI搭載されている。

結成理由は「日本と言えばロボだろ」という鶴の一声だったとか。日米の均衡隊の歯が立たなかったナメゴンに対して前身である対怪獣空挺機甲実験団によって初投入されたセブンガーでの討伐の成功が、設立のきっかけになった事が明らかにされている。

保有戦力は以下の通り。

対怪獣特殊空挺機甲(特空機)

①特空機番号機・セブンガー（\*初号機であるため更に二機程量産されている）

? セブンガー歌舞伎・・・通常型（瓦礫撤去、通常戦闘など）

? セブンガータ閻・・・夜戦特化型

? セブンガー拳・・・硬芯鉄拳弾特化（半ばヨウコ専用機）

? セブンガー宇宙・・・真空空間特化型（二人乗り可能・現在制作中）

②特空機式号機・・・ウインダム

? ファイヤールウインダム・・・火炎攻撃武装型

③特空機番号機・・・キングジョーシロガネ

④特空機番号機・・・バラディノイド（※特機群が保有）

（それぞれストレイジが保有する対怪獣・災害兵器）

D4・・・。 次元をも操るエネルギーを破壊力として転用した、軍の異次元潰滅兵器。

器。特機群が保有している。

ステッグ・・・ストレイジが保有する特殊車両。ベースはトヨタ・LQ。

ストウラー・・・汎用高機動車。危険な地帯の調査によく使用される。

ライズライザーZ

・・・力を抽出する青いブレード状の装置。バラディアの専用道具でもある。バラディアン達の力が保存されている。ライズライザーの量産型である。絆の力で認めら

れると、保存された力が解放され、抽出。強化形態になることが可能。地球の言葉で「Z」には「最後」という意味があることから、長きにわたる争いを終わらせ、宇宙に平和をもたらす最後の勇者になれ、という願いが込められたもので、ある歴戦のバラディアンから名付けられた名である。ライズソウルを装填するスリットが3つある。このブレードをゆつくりと扇状に展開するとライズソウルのスキャンが行われる仕組み。

### ライズソウル

・・・歴代バラディアンを宿したメダルのようなアイテム。ライズライザーZに装填することで各バラディアンをライズライザーZに保存することが可能。強大なエネルギーを秘めているが、そのままでは解放することはできない。

### モンソウル

・・・怪獣や異星人の力を宿したメダルのようなアイテム。ライズライザーZに装填することで同様に能力の解放が可能。しかし本来想定されていない何者かによって違法に出現している危険なアイテムであるため、制御が難しい。

### 〈登場人物〉

蛇倉 正太

・・・作戦統括・現場指揮担当。怪獣に対する作戦立案や現場での指揮を行うストレイジの隊長。一癖も二癖もあるチームの若者たちをまとめる良きリーダーで、一見飄々としているも明るくフレンドリーなとした性格。34歳男性。しかしその正体は……。

中島 洋子

夏川 遥輝

・・・作戦班・パイロット担当。特空機を操縦し怪獣と戦う実戦部隊。ローテーション制で操縦と地上任務に分かれて行動。

洋子は高い操縦技術を持ったエースパイロットの女性。年齢は24歳。地球防衛大を首席で卒業したエリートでもある。遥輝の先輩。軍人の家系であり枯れ専。そのため若く未熟なゼステイにはあまり快く思っていない。

遥輝は実質的なデスマアース人側主人公の男性。年齢は23歳。明るい体育会系の青年で、何事にも一生懸命な新人パイロット。一方で繊細な一面も持っている。ゼステイと出逢い、共に戦っていく中で絆を紡いで行く。選ばれし者の資格を持つ神籬であることをまだ彼は知らない。

大田 結花

・・・科学技術兼装備研究開発班担当。特空機の装備や、対怪獣用のアイテムを開発

する部門。怪獣に関するデータの取りまとめや管理も行っている。怪獣に強い興味を持ち、より怪獣と直接かかわりたいという思いからストレイジに参加した。年齢は22歳女性。天才ならではの怪獣に対して博識な知識を持つ反面、マッドサイエンティストな一面も持つ。

稲葉 虎二郎

・・・整備班のリーダーを務める老年男性。特空機の整備を担当。昭和気質の寡黙な人物だが、ストレイジメンバーや整備班からの信頼は厚く「バコさん」の愛称で親しまれている。年齢59歳。26歳の娘ルリがいる。過去の経歴は一歳不明。

栗山 佐武郎

・・・ストレイジを統括する地球均衡隊日本支部。の現長官。ストレイジの創設者。男性64歳。ロボットと怪獣の戦いで起こる被害と開発予算の捻出に迫われ、胃痛に悩まされている。

結城 真依

・・・地球均衡隊日本支部長・作戦部長の女性軍人。ストレイジとは別に結成された『第一特殊空挺機甲群』通称「特機群」における、隊長格たる作戦部長に就任している。ストレイジに対して余り快く思っておらず、任務に忠実で冷徹な指揮官。36歳。

朝倉 陸

・ ・ ・ 銀河マーケットの店員。22歳。アパート「星雲荘」で暮らしている。両親は産まれてすぐに亡くなってしまった孤児だった過去を持つが、フリーター時代に出会った仲間たちに支えられ、共に前を向いて進んでいる。ジャスティニーの選ばれし者。

伊賀望 蘭

・ ・ ・ レイヤノと融合している選ばれし者。世帯持ちのサラリーマン。朝倉陸とは親しい間柄。

鏑木 慎也

・ ・ ・ 日本支部怪獣研究センター生命科学研究所、通称『怪研』に勤務する科学者。しかし最近態度が急にデカくなり、連絡もロクにつかないと同輩から不審がられている。

ゼステイ

・ ・ ・ オリトアース人側の主人公。見た目こそ15歳くらいだが、実年齢は約50歳女性。第四世代の新人パラディアン。レイヤノに憧れ、弟子入りしているが当人からは「半人前どころか三分の一人前」とされている。実技なら自信があるも勉強は苦手であり、特に言語がからつきし苦手。そのためあまりにも特徴的な喋り方をする。ハルキと出逢い、共に戦っていく中で絆を紡いで行く。固有武器に『エンシエスピアロー』と呼ばれる槍状の武器を持つ。守護快獣はゲネガーク。

アルファエツジ

・・・ゼステイがライズライザーZで変化した形態。ロセダン、リオージ、レイヤノのライズソウルを使用。宇宙拳法バリツを得意としたスピード型の戦士。

ベータスマツシュ

・・・ゼステイがライズライザーZで変化した形態。ファस्पム、ダイスト、アルフーメのライズソウルを使用。強化された筋肉を駆使した怪力と切断技に特化した戦士。

ガンマフューチャー

・・・ゼステイがライズライザーZで変化した形態。スティア、ミマクト、フォトのライズソウルを使用。無数の幻惑を駆使し、トリツキーな戦法を得意とする超能力を使いこなすことができる神秘の戦士

レイヤノ

・・・第二・五世代のバラディアン。第二次、第三次を中心に活躍したバラディアンで、ゼステイから師匠と慕われている。ゼステイに対しては敵しい態度を取るが、内心はその身を案じている。推定227歳女性。固有武器はイージスボウとワイドアローの弓と矢である。「輝破」「燃力」「慈魔」の力を施す形態がある。

ジャスティニー

・・・第三世代のバラディアン。悪の戦士・ヴェリガの娘とも呼べるような特殊な生

い立ちを持ちながらも、自信の運命を乗り越えた若きバラディアン。かぎ爪型のジヤマダハルのような固有武器『レッキングクロウ』を使って戦う。守護快獣はゼガン。

### 奈緒美オウジンブ

・・・第三世代のバラディアン、オウジンブと彼の選ばれし者である地球人の女性、夢野奈緒美が融合したバーンドヒーロー。二人はライバルであるジャングラーとの激闘の果てに絆の力を手にした。現在は第三・五次デスモストラグルにて活躍中。

### 陸ジャステイニー

・・・ジャステイニーと陸が融合したバーンドヒーロー。リミッター解除された脅威的な力を誇る。

### 蘭レイヤノ

・・・レイヤノと蘭が融合したバーンドヒーロー。

### シャグラスジャングラー

・・・敵か味方か。陰で暗躍する謎の異星人。



# 第一話 ご唱和お願いします、我の名前を！

ここはデスモバース西暦2222年以降の地球。日常的に出現する怪獣、異星人に対抗するため結成された組織・ストレイジがこの地球を守っていた。

ある日、伊豆原高原の観測所付近に毒炎怪獣セグメゲルが出現。ストレイジ統合基地では、夏川遥輝隊員が搭乗する特空機壱号機・セブンガーが出勤。

建物の屋上が開き、セブンガーがせり上がり、背中の飛行用ブースターで現場まで移動。

セゲル星人に侵略兵器として使役される怪獣であるセグメゲル。召喚後は一切の命令を受け付けず、本能のままに暴れ狂う野良怪獣として観測所に進撃していた。

結花隊員がセグメゲルのデータを説明する。

「やっべえー！セグメゲルは口から放つ毒を含んだ紫色の火炎放射『セゲルフレイム』を武器としてるばかりか、この毒はセゲルフレイムのみならず、全身の体液にも混ざって全身毒まみれなすげー怪獣だよ。うひょー！遥輝イ、ちやっちやと採取しちゃって」セグメゲルの毒炎攻撃に苦戦するセブンガー。また、通常のセグメゲルとは異なり目

が赤く変貌し、凶暴化していた。しかしセブンガーもタダでは帰れない。右腕に装着したドリル攻撃、超硬芯回転鉄拳で牽制。そして身軽に動いて繰り出したドロップキックが炸裂。その勢いで崖から崩れ落ちたセグメゲルは地面に強く叩きつけられ絶命した。帰投した遥輝隊員だったが、セグメゲルの死体や瓦礫撤去をするのを忘れて帰ってしまったため、再度出撃する羽目に。汎用高機動車ストウラーも出動し、後始末をすることに。

所変わって、オリトバース同時刻。

バラディアンの新人であるゼステイとはある戦いを終えて、自身の不甲斐なさを痛感。師匠（仮）であるレイヤノの指導の元、凶暴宇宙鮫ゲネガークを自身の守護快獣にすべく戦闘に挑戦。しかしゲネガークは強かった。あまりの凶暴ぶりにゼステイはコテンパンに返り討ちにされてしまい、ゲネガークは逃亡。

呆れるレイヤノ。ゲネガークを追い、守護快獣として認められるよう単独で立ち向かうよう叱咤激励する。まだ未熟なゼステイの身を案じたレイヤノはゼステイにライズライザーZとライズソウルを彼女に授けた。

「待つのでございませう！ゲネガーク!!」

ゲネガークを追うゼステイだったが、師匠に言われたことをあつさり忘れ、無鉄砲にも猪突猛進。案の定腕を噛まれ、ライズライザーZを落としてしまう。

「あの野郎……、俺の弟子を名乗るところか、コイツがなきやまだ三分の一人前の癖に」  
心配でこつそり付いてきたレイヤノはゼステイが落としたライズライザーZを回収する。

ゲネガークは飲み込んでいたブルトンを吐き出しゼステイを異空間に放逐し、更に時空の穴・ワームホールを作り出し逃亡しようとする。

「危ねえ、ゼステイ！」

「師匠オッソー!!」

間一髪、ゼステイを庇ったレイヤノ。異空間に放逐される間際、ゼステイにライズライザーZを託し、これ以上被害を及ぼさせないよう必ずゲネガークを捕獲するよう促し、消失。ゼステイはゲネガークを独り追った。

デスモバースの地球では、セグメゲル戦の後始末を行っていた。そんな最中、突如空に穴が空き、ゲネガークが出現。ケーブルによる有線電力供給で作業を行っていたセブンガーだったが、突然の襲撃でケーブルが断線。更にセグメゲルの亡骸をそのままかぶりついてしまった。

「ギャオオオ!!」

するとセグメゲルにも生じていたように、目が赤くなり、凶暴化。ゲネガーグは暴走し、セブンガーは戦闘不能になってしまう。

「洋子、遥輝の援護だ。ゴー、ストレイジ!!」

初号機であるため二機ほど量産されているセブンガー。洋子隊員専用のセブンガーは、精悍な目つきをしており、拳を発射する硬芯鉄拳弾を得意としている。

「うおお!? これはちよつとやばい!!」

現場ではなおも暴れ回るゲネガーグ。倒れたセブンガーの中で脱出に時間かかる遥輝に危機迫る。そこにゲネガーグを追ってゼステイも降臨。ゲネガーグを捕獲しようと巨大化し、戦闘を開始する。

「アイツは……バラディアン?」

過去の戦争で、この世界にも何度か現れていたバラディアン。しかしまだ若く、未熟な少女であるゼステイ。人命救助を優先せず、自らの目的を最優先に戦闘をしてしまっていた。更にバラディアンはデスマバースでその存在を長く維持できない。徐々に体が透明になりつつあった。

そこに洋子が乗るセブンガーが到着。硬芯鉄拳弾をお見舞いし、ゼステイに厳しくあたる。

「ちよつとそのバラディアン! それでもあんたは守護者なの!」

その言葉で我に返ったゼステイ。「一人きりでなんでも出来るようにやまだまだバラディアンとして半人前」とレイヤノ師匠から言われていたことも思い出し、ゼステイは少し距離を取り、ライズライザーZを使用。光ったライズソウルを装填。ロセダン大師匠、リオージ大師匠、レイヤノ師匠。三人のバラディアンの力が解放された。

「ご唱和お願いします、私の名前を！」

ゼステイは師匠達の力を宿した形態、アルファエッジに変化した。宇宙拳法バリツを得意としたスピード型の戦士だ。秘伝の神業、アルファチェインブレードをヌンチャクのように振り回して攻撃。

そして、戦闘中一度しか放てない必殺技・ラストジャッジである超高熱の破壊光線、ゼステイウムメーザーを両目から発射。爆発に巻き込まれたゲネガークは気絶。ゼステイはゲネガークを捕獲し、ジューゼーレタイマー・エネルギーの中に封じ込めた。しかしゲネガークの調子は依然としてまだおかしく、もう暫く安静にさせておく必要があるようだ。

洋子が乗るセブンガーは遥輝が乗っていたセブンガーを回収。戦士としてまだまだ未熟なゼステイに厳しい目を向けながら後にした。少女は戦いが終わり等身大に戻る。しかし彼女は上述した通り、これ以上ここに長居することはできない。そこで、脱出して一人放浪していた遥輝がゼステイと邂逅し、近辺の神社まで運び、体力をなんとか温

存することに至った。

## 第二話 戦士の真髄

インナースペースに入ったゼステイはゲネガークの様子を見守る。セグメゲルを食べて何か伝染した影響か、異変はまだ治癒されていない。このまま戦闘で守護快獣として召喚すれば制御仕切れないだろう。ゼステイはゲネガークをジュゼーレタイマー・エネルギーの中でもう暫く休ませることにした。

神社・寺・教会は、バラディアンが数少ない依代となる選ばれし者と同化しなくてもこの世界・デスマベースでその存在を維持できる神聖な場所だ。ゼステイに八幡宮来宮原神社に居座り、レイヤノや他のバラディアンの戦士達と連絡を取ろうとするも、状況が状況である。レイヤノがブルトンに飲み込まれた上、戦争中にご時世、連絡は取れない。ゼステイはとりあえずデスマの地球で駐留することに決めた。

静岡県熱山市・クリーンインフィニティ発電所近辺。

夜中に走る電車が突然吹き飛んで脱線する。まるで見えない何かに投げられたようだ。その後も周囲でいきなり建造物が崩れたり鉄塔が倒壊したり異常現象が勃発。遂に火事が起こり、透明の怪獣が暴れていることが確認。ストレイジに出動命令が下され

る。

結花が搭乗するセブンガーが発進、現場に到着した。このセブンガーは夜戦特化型の機体、通称セブンガータ閻である。

「透明怪獣と言えばネロンガ！ 角の根元と首辺りに電気を溜める変圧器官があつて、吸収した電子イオンの働きの透明になれる……うっひよっ、ちやつちやつと仕留めて解剖してやるー!!」

結花の言う通り、透明怪獣の正体はネロンガだった。しかしネロンガの透明能力はこれまで確認された個体とは異なる能力を持っていた。

「え？ 消えた。なんで?」

電気を吸収する際にその正体を現すネロンガは新たに蓄積することによって再度透明化したのだ。更に、透明状態になったネロンガは、自らの体温を周囲の外気温に同調でき、セブンガータ閻のサーモグラフィでも検知することはできない。

「うわああ!!」

ネロンガに大苦戦し、結局逃げられてしまった。朝焼けになると同時にネロンガはどこかに姿を眩まし、破壊された街の残骸に倒れるセブンガーは無残にストレイジの敗北を突きつけられた。

基地のメインルームでは蛇倉隊長が対ネロンガ二戦目に切り替えた指示を出す。



「幸い開業まもないクリーンインフィニティ発電所から電気は少量しか吸収されていない。この調子だと餌の場所を覚えた奴が今晩また現れるぞ。よし。結花、洋子、他の隊員は至急発電所にセブンガー各機を出動し、瓦礫撤去作業にかかれ。作業終了次第、ネロンガ誘導作戦を指示する」

「了解！」

「あの隊長、俺は……」

「遥輝は先日地球に現れたバラディアンの元に向かって彼女とコンタクトを取ってこい。お前確か場所を知ってたよな。ストレイジがバラディアンと手を組み、共に地球を防衛する重要な任務だ」

「押忍！」

蛇倉隊長の命令の元、遥輝はゼステイがいる八幡宮来宮原神社へと向かった。隊員達がメインルームからいなくなり、蛇倉は一人眩く。

「少々地球に滞在してくれよな、ゼステイ」

ステッグを走ら神社に到着。遥輝はゼステイと再開する。

「あの！ 前は助けていただきありがとうございます！」

「そんな……、ウルトラかたじけない。寧ろお前がこうして神社まで運んで貰ったからこそでござるよ。改めて自己紹介しよう、私はゼステイ。バラディアンの戦士だ」

「押忍！ 自分、対怪獣特殊空挺機甲隊ストレイジの隊員、夏川遥輝っす！ 今、地球は日夜問わず出現しまくる怪獣の脅威に晒されています。特に昨夜現れたネロンガってやつが強くて強くて……」

「そうであつたか。宇宙では第四次デスマストラグルが激化しているが、地球も大変でございますなあ」

「押忍。特空機つてロボットで戦いまくる日々っす」

「成程、あのセブンガーつてお方がその特空機つてやつであつたか。俺達バラディアン、バーンドヒーローも今は宇宙中での激闘に明け暮れる日々なのですよ。以前戦つたゲネガークは自分の守護快獣にしようとして逃してしまった個体だったのだ。恐らくゲネガークはセグメゲルの体内にあつた小型新太陽の破片、ジュゼーレフラグメンツを食した影響があつて凶暴化していた。今この場をお借りして詫びらせてくれ」

「いえいえ、そんなくらい良いっすよ。こうして無事なんだし」

「これはかたじけない。よおっし、ならば俺もこの地球で共に戦つてみせましょう！」

「良いんすか？」

「ああ、レイヤノ師匠とも離れ離れになつてどうしようか迷つていたところだございま

したからな」

「ありがとうございます！ あ、そーいやゼステイさんは何歳なんですか？」

「え、なんで今？」

「バラディアンの寿命は緩やかだと聞きます。こういうのは肝心つすからね」

「えつと、大体50歳、だけど……」

「うえっ!? 高校生くらいに見た目ののに、俺より全然年上じゃないつすか……ゼステイさん、生意気言つて、すみませんっした！」

「ええ……」

こうしてゼステイとストレイジの協力体制が締結された。早速、今日行われるネロンガ誘導作戦に備えて修行をすることになった。

そもそもネロンガ誘導作戦とは、電気を大量に溜め込んだ電車を使つてネロンガを誘い出し、対ネロンガ用鉄塔に激突させ、激しい爆発に巻き込ませて怯ませた後にセブンガー夕闇に乗る洋子と、修行を完成させた遥輝のセブナーとゼステイが戦闘する作戦である。

この戦いでは、ゼステイとストレイジの共闘戦線。そして遥輝達が透明の敵を倒す術を身に付ける必要があるのだ。

ネロンガ対策としてゼステイと遥輝の二人は修行を続けるも、見えない敵と戦う訓練

にしては粗末な出来だ。そこに、様子を見に現れた謎の宇宙人であるシャグラス・ジャングラーが現れる。

シャグラスジャングラーは二人の間を割って瞬間移動で翻弄する。

「なんなんすかアンタ！」

「奴に勝ちたいのだろう。ならば、見えるものだけを信じるな」

「待てっ……ってあれ？ 消えた……」

ジャングラーを行方を眩ました。

「遥輝、アイツが言っていた通りだ。俺達も目を瞑り、感覚をたぎらせて修行を続行するぞー！」

「押忍ー！」

こうして、目を瞑り感覚をたぎらせた二人は息ピッタリに攻撃を読み合うことができようになったのだった。

二人が修行を完成させる頃には既に戦闘が始まっており、作戦通りに罠にハマったネロンガとセブンガー塔が戦闘開始していた。

ゼステイはライズライザーZにライズソウルを装填する。ロセダン大師匠、リオージ大師匠、レイヤノ師匠。三人のバラディアンの力が解放された。

「ご唱和お願ひします、我の名前を！」

「ぜ、ゼステイーツツ!!」

「……遥輝、これは自分を戒めるための掛け声なんで返事しなくて良いんだ」

「あつ、すみません。続けて」

ゼステイはアルファエッジに変身した。早速飛行する。ハルキは現場で待機させている硬芯鉄拳弾に特化しているセブンガー、セブンガー拳の元に車を走らせた。

洋子は優勢にネロンガと戦うも透明能力に苦戦、建設現場にぶつかり倒れてしまった。

「くっ……」

ネロンガが追い詰め、絶体絶命なその時。朝焼けと共に二人の逆光が。

「洋子先輩！ お待たせしました！」

「私達も闘うのでございますよ!!」

「遥輝、バラディアン……遅い」

洋子とバトンタッチし、ゼステイと遥輝が搭乗するセブンガーのタッグマッチの幕が降りる。修行の成果か、息ピッタリなコンビネーションで透明能力に翻弄されることなく戦闘。ゼステイのチェインスラッガーで攻撃を防ぎ、セブンガー拳の鉄拳で顎を砕き、そのままネロンガを地面に流れるように叩きつけ、絶命させた。爆発四散する。

「ったく。少しはやるね。ありがとう、遥輝、それに……」

「ゼステイでございます」

戦いが終わり、洋子にとりあえずは評価された遥輝とゼステイ。しかし。

「でえーもおおー、周りを見なさい！ 被害状況を考えない戦い方はやめなさい!!」

「あつ……」

「えつと……、自分、長居は禁物なので説教はまた今度おおおお!!」

ゼステイは逃げるように飛んで帰ってしまった。

「こらあ！ 待ちなさああーい!! 遥輝も!!」

「つす……」

こうしてゼステイ、そして遥輝含めるストレイジの地球での戦いが始まったのであった。

### 第三話 「L I V E」 怪獣輸送

トンネル工事予定の五甲山。そこで古代怪獣ゴモラに似た岩「ゴモラ岩」が発見された。しかし調査の結果、休眠状態の本物のゴモラが露出していたことが判明。地球均衡隊日本支部は休眠を妨げないようゴモラを無人島であるスフラン島に輸送して、森山の奥深くに掘って自然に還すことを決定した。

また、この作戦を機に地球均衡隊アメリカ本部から予算会議のために来日及びゴモラ輸送作戦を視察しに来た事務次長ロバート・アンダーソンに、特空機式号機開発予算増加のアピール狙いを持って蛇倉隊長は栗山長官と同行して事務次長が待つビルでプレゼンテーションを始めようとしていたのだった。

既に作戦は始まっている。遥輝はストウラーに乗車してスフラン島にて待機。現場に到着した洋子がセブンガーに搭乗してゴモラ輸送を開始したのであった。

「ぐっ……コイツ、想像よりも重い！」

ゴモラの体重は2万t。対してセブンガーは3万8千トン。常用作業の最大荷重は、セブンガーの体重の40%である必要がある。不可能ではないが、セブンガーの設計上、かなり困難な作業となるだろう。

ネロンガ戦にてストレイジとの協力関係を築いたゼステイは、出勤要請メールや緊急速報がいつでも届くよう遥輝から業務用スマートフォンをもらっていた。本日の自主練が終わり、小休憩がてら見たネットニュースでゴモラの件を知ったゼステイは、レイヤノ師匠に渡されていた六つのライズソウルを見つめる。ロセダン大師匠、リオージ大師匠、レイヤノ師匠。既に解放されているこの三つのメダルは格闘やスピードには優れているが、パワーが弱い。しかし自主練で鍛え上げた成果、今こそ見せる時だ。残る三つのライズソウルが光り輝いた。

「フアスペム兄さん、ダイスト兄さん……それにアルフーメ兄さん。力を貸してくれるのでございますな！」

ライズライザーZに装填する。

「ご唱和お願いします、我の名前を！」

ゼステイは兄のように頼れるの歴戦のバラディアン達の力を宿した形態、ベータスマッシュに変化した。レスリング技と切断技に優れたパワー型の真紅の戦士だ。ゼステイは巨大化せずにそのまま飛び立つ。

「ぐっ……海を渡るのに一人で支え切るのは流石に、キツイ……!!」



なんとか五甲山や街中を乗り越えた洋子／セブンガーだが、ここからが問題だ。スフラン島に向かうまでの最大の障害である海を渡らなければならぬ。ただでさえ不安定な床場を移動するのは危険が伴う。エリートパイロットである流石の洋子でも限界が迫ってきている。

「セブンガー殿、助太刀に來たでございませよ！」

そこにゼステイも到着。事情を聞いたゼステイは、セブンガーの影に隠れながら、プレゼンテーション用の撮影ドローンに映らない位置からゴモラを支える。

「なんの、これしき！」

すると途端にセブンガーの荷が降りるような軽さになる。巨大怪獣を抱えていてもゼステイは平気そうだ。

「助かったわゼステイ、このまま行くわよ！」

「押忍！でございませ！！」

等身大サイズのベータスマッシュとなったゼステイの助力もあって、セブンガーはスフラン島に到着。そのまま手でセブンガーが掘った大きな穴の中に休眠中のゴモラを降ろし、見事輸送作戦は成功。また、蛇倉隊長及び栗山長官はストレイジの技術力アピールに成功したのであった。このまま平穩に仕事完了するかと思われたのだが。

「ギシャオオオツツ！！」

謎の咆哮と共に大地が揺れ動く。同じくスフラン島付近で眠っていた巨大な個体のゴモラの個体が目を覚ましたのだ。しかし様子がおかしい。目が赤く、他と比べて凶暴な見た目だ。ストレイジのメインルームで一連の様子を伺っていたユカが叫ぶ。

「ただのゴモラじゃない、あれはEXゴモラだ！ でも、なんで!？」

ゼステイは推察する。

「ゲネガーク同様、ジュゼーレフラグメンツによって暴走してしまったのでしょうか」

一つならまだしも、ジュゼーレフラグメンツがまた出てくるとは普通ならあり得ない。おそらく背後に何者かがいるのかもしれない。この地球には、何かが起こっているというのか？

「うわあっつー?!?!」

立ち向かうセブンガーだが、力の差は歴然。あつという間に倒されてしまう。遥輝はストウラーを操縦して洋子隊員の救出に向かう。

「隊長！ 今すぐ増援を！」

EXゴモラは撮影用ドローンを睨みつけ、威嚇する。

「……いや、時間がない。ここはゼステイに任せてもらおう」

理由はそれだけではない。わざとここで他のセブンガーを出さず、怪獣頻発の脅威性と深刻な予算不足、そしてバラディアンに力を頼ることしかできないストレイジの現状

というシチュエーションを作り出す魂胆が蛇倉隊長にはあった。見事事は上手く運び、プレゼンテーションのアップールの材料となつてほくそ笑む蛇倉隊長。脱出した洋子を救出した遥輝は当然そんな意図にも気付かず、安全な距離までストウラーを走らせたのだつた。

ゼステイは巨大化して戦鬪を続けたかつたがこれ以上消耗すれば存在を維持する事が困難になる事は目に見えている。守護快獣のゲネガークもまだ調子は良くない。等身大サイズでの戦鬪の続行を決めた。ベータパンチ。ベータキック。ベータパワーキック。かざかざのレスリング技でE Xゴモラを翻弄し、伸縮自在の尻尾を伸ばして敵に突き刺すテールスピアーすらも弾き返す。

「ギシャオオオオ!!!」

E Xゴモラは最後の切り札であるE X振動波を放つた。だがベータスマッシュの敵ではない。カッター状の切断技、ベータクレセントスマッシュで相殺される。ベータスウィングでE Xゴモラを投げ飛ばし、ゼステイウムエネルギーを纏つた拳を振り上げる。そして、ラストジャッジであるゼステイウムアッパーが炸裂。見事E Xゴモラは爆発四散したのであつた。

今回の戦いで、ストレイジに式号機口ボ開発費予算の増加が承認された。ストレイジ一同は早速特空機式号・ウインダムの開発に取り掛かるのであつた。

## 第四話 式号機発進プロジェクト

それから一ヶ月の月日が流れた。デスモバースの地球では特空機式号機・ウインダム  
の開発の最終段階が終わり、試験運動も無事完了。次の戦いでの出撃が待たれていた。

一方、オリトバースの惑星アインでは、第三世代のバラディアンにしてヴェリガの娘  
でもあるジャステイニーがラストジャツジメンター・ギルバリスと戦闘状態にあった。

ヴェリガとはかつて第一世代のバラディアンだった戦士である。彼は悪に堕ち、オリ  
トバースの宇宙支配を目論み恐怖に陥れた邪悪の軍勢・ヴェリガ軍を結成。第二次デス  
モストラグル、第三次デスモストラグルと幾つもの激しい戦争の末、ヴェリガの遺伝子  
を受け継ぐデザイナー・ベビーとして産み出された不完全破壊生命体・ジャステイニーが  
造り出された。しかし、正義に目覚めたジャステイニーはバラディアンとなり、レイヤ  
ノらと共にヴェリガ軍を壊滅し、自信の運命を乗り越えたウルトラ凄いバラディアンな  
のだ。

ジャステイニーに押されたギルバリスはデスモバースへと逃げ込み、宇宙空間での戦  
闘に持ち越した。ジュゼーレフラグメンツを吸収して強化したことで体制を立て直し  
たギルバリス。サイバー空間を駆使した攻撃に翻弄されてしまい、ジャステイニーは苦

戦。近辺で活動中のバラディアン及びバーンドヒーローに応援要請をした。

「ジャステイニー先輩!? 俺も行きます!」

ジャステイニーの要請をキャッチしたゼステイは、各地を転々としていた神社から飛び出し、宇宙へと向かったのだった。

それから数時間後。巨災が起こる。ジオフロント（地下都市）の開発工事による騒音により目覚めた地底怪獣テレスドンが埼玉県熊丘市第二地区の地上に出現した。口吻から超振動波を発生させて地中を掘り進むテレスドンを止めるため、ストレイジはウインダムを出撃させることを決断した。

実はウインダムの開発は予算が降りる以前からかなり難航していた。しかし結花の発案を元に、ストレイジ整備班のリーダー、稲葉虎二郎ことバコさんの尽力により、ネロンガの電力増幅の仕組みを応用した充電を取り付けられた。これにより、ウインダムは長期間活動を可能にしたのだ。特空機の製造、メンテナンスはこのような整備班達の助力があつてこそである。パイロットに選ばれた洋子はバコさんにお礼を述べる。

「バコさん、ありがとうございます。しかし本当に良く形になりましたね……」

「昔、ちよつとな。洋子、必ず勝つて来いよ」

「はい!」

首と手足にある噴射口からジェットを噴射して高速飛行をするウインダム。現場に到着。テレスドンは膨大な熱エネルギーを火炎袋と称される器官に蓄積し、マグマエネルギーを20,00℃の火炎・デプス火炎に変換して口から吐き出して周囲を焼き尽くしている所であった。

「ギーヤオオ!!」

ウインダムに敵意を向けたテレスドンは、全身を回転させたドリルくちばしで先制攻撃する。攻撃を回避したウインダムはターゲットをテレスドンのくちばしに合わせ、額からレーザーショットをピンポイントで狙い撃つ。

「ギーヤ!?」

怯んだテレスドンはすぐに立ち上がり、デプス火炎を放射。しかしここで負けるウインダムではない。全身の多連装誘導弾発射システムから20式対怪獣誘導弾を放ち応戦。全方位から繰り出されるミサイル攻撃にテレスドンも遂に崩れ落ちたのだった。そのままウインダムは火災消火用のウインダム水流を起動、燃える街の消火活動を行った。

「お待たせしました!ジャステイニー先輩!」

ゼステイは兄弟子と慕うジャステイニーの元に合流していた。ジャステイニーはギ

ルバリリスについて説明する。

「ギルバリリスは元々、平和を願うオリトバースの惑星クシアで製造された人工知能。けどダークネスミリタリー側に付いてこの世界を闇に陥れることこそが平和への近道と判断してしまい、第四次デスマストラグルに参戦したんだ」

ギルバリリスが出現。戦闘状態に入るゼステイとジャステイニー。しかし、防衛バリア・バリスルーチエを展開して防御。固有武器を持たないゼステイの攻撃は全て無力化される。

更にギルバリリスは両腕を砲塔の集合アーム・バリスブラチアに回転変形させて、全砲門から一斉射撃を行う必殺技・バリスダルティファイを解き放った。

「ぐあああつっ!!!」

ジャステイニーとゼステイがダメージを負った刹那、ギルバリリスは近辺に太陽系第四惑星・地球を確認、破壊対象と認識。シビルジャツジメンター・ギャラクトロンMK-11を送り込んだ。

「ゴオーー!!!」

地球に降り立ったギャラクトロンMK2は、消火活動が終わり帰投中のゼステイに牙を向ける――。

## 第五話 暗躍の始まり

ギヤラクトロンMK2に奇襲され、地上に墜落するウインダム。その様子を崩れたビルの残骸の中から観察する男。日本支部怪獣研究センター生科学研究所、通称『怪研』の印が描かれた緑の防護服を着ているその男の名は、鏑木慎也。彼は不気味に笑いながら呟いた。

「コシ・カレカレータ……」

ギヤラクトロンMK2の猛攻に耐え抜き立ち上がるウインダム。

「なんなのコイツ、折角の初陣なのに！」

ウインダムの緊急事態に遥輝はセブンガーに、蛇倉はセブンガー拳に、結花はセブンガータ閤に搭乗して現場に駆けつける。三体のセブンガーがウインダムの盾になりつつギヤラクトロンMK2を囲む。強力なパンチを放ち、身軽なジャンプで両足キックを決め、頭からぶつかって頭突きをかましてもギヤラクトロンMK2の装甲に傷は付かない。

「ゴオーー!!」

ギヤラクトロンMK2は後頭部の戦斧ストロングベイユを右手に握り斬撃していく。



セブンガー達が怯む中、ウインダムは手首に内蔵された高速回転機能を利用した回転パUNCH、高回転硬芯鉄拳をお見舞いする。ギヤラクトロンMK2は手の甲に装備している近接格闘用ブレード、ギヤラクトロンクリンガーで防ぐ。そのまま手の甲のビームキャノン、ギヤラクトロンシユトラールで反撃する。

「背後がガラ空きだぜ、新型さん」

セブンガー拳は硬芯鉄拳弾を発射。しかしギヤラクトロンMK2は両肩と両膝に武装したバリア発生装置から魔法陣バリアを展開。そのままデジタル魔法陣で姿を消す。

「なにっ!？」

セブンガー拳の隣に出現し、ギヤラクトロンファンングで拘束する。そのままギヤラクトロンベイルで腕がへし折られる。

「隊長オツツー!!」

他の特空機達が応戦するが、手先のマシンガン・ギヤラクトロンゲベールが連射されて近づくことが出来ない。

「ここまでか……洋子、結花、遥輝。俺が囷になる。後は頼んだ」

余力の少なくなっていたヘビクラが乗るセブンガー拳はバリアを破き、隊員達が乗るセブンガーを庇って大破してしまう。

「隊長!?! 俺、救助に行ってきますす!」

動揺した遙輝はセブンガーを停止させて、ステッグに乗り込んで救助に向かうが、そこには蛇倉は見つからない。遙輝は自分の力不足で死んでしまったのかと思い悩む。

「……フツ、やるねえ。久しぶりに血が騒ぐぜ」

煙の中、何者かが最後の切り札として自身の守護快獣であるゼツパンドンを召喚する。

「ゼツ、パン、ドン……プルルルル」

ゼツパンドンとギヤラクトロンが激しく衝突。暴れ回る二大怪獣に周囲の誰もが手を出せない状況に遙輝は憂いていた。

「俺もゼステイさんのように、もつと力があれば……」

「何言ってるの遙輝！ バラディアンに頼らなくても私達はまだまだ街を守ることはできる。今できることをやりなさい！」

「俺のできることを、そうか。押忍！」

洋子らは周囲に被害が出ないようギヤラクトロンMK2とゼツパンドンを囲んで警戒体制に入る。

「ゼツトンとパンドンが合体したような怪獣。一体あの子は何者？」

「どっちにしろ、このままやり合ってくれるなら有難いわ」

「あいつは敵なのか、それとも……」

ゼツパンドンに対して隊員達の憶測が飛び交う。魔法陣バリアを噛み砕いたゼツパンドンに、何者かが指示を出す。

「やれ、ゼツパンドン撃炎弾だ」

紫色の破壊光線と超高温の火球が放たれ、ギャラクトロンMK2は倒された。と、同時に、ゼツパンドンは行方をくらましてしまった。

「消えた……」

そこにへ蛇倉からの通信が入る。

「みんな、無事か？」

「隊長、生きてたんすか！」

「当たり前だ。これ以上何か現れたら堪らん。一旦帰投して、今後の作戦を立て直すぞ」  
そこまで言つて通信を切ったヘビクラ。彼の手中にあるジュゼーレタイマー・エネルギーのような三日月の球体を見つめる。中にはゼツパンドンがいた。そう、ゼツパンドンを召喚した謎の男こそが蛇倉だったのだ。

一方、宇宙空間で現在も戦闘を続けているジャステイニーとゼステイはギルバリスに苦戦。それもそのはず。ゼステイはパラディアンの特徴である己の固有武器を生成出

ユニークウェポン

来ていなかったのだ。そんな戦力外状態のゼステイに、ジャステイニーは最後の希望を見出した。

「ゼステイ！ 固有武器を生成するんだ。強い思いでねんじれば、君は新たな力を手にすることができる!!」

ギルバリスは頭部の角によって相手を貫くバリスコルノーラをジャステイニーはかぎ爪型のジャマダハルのような固有武器、レッキングクローでゼステイを庇う。

「先輩っ!？」

「ぐはっ……」

ジャステイニーは散っていく。

「先輩……、まだだ……、俺達バラディアンは負けない!」

ゼステイの負けない思いがジュゼーレエネルギー・タイマーと共鳴し、槍と弓が融合したような固有武器・エンシエスピアローを生成するのであった。

## 第六話 帰つてきた戦士たち

地球へと墜落したジャステイニー。彼女が目を覚ますと、そこには一人の青年が自身を献身的に看護している様子がみられた。

「君は……」

「やつと目を覚ましたね！ 僕の名は朝倉陸。君は？」

「助けてくれてありがとう、私の名はジャステイニーだ。よろしく」

銀河マーケットの店員である朝倉陸が暮らすアパート『星雲荘』。彼と話していくうちに、ジャステイニーは朝倉陸こそが己の選ばれし者であることに勘付く。

時を同じくして、ゼステイはエンシエスピアローでギルバリス相手に優位に立ち向かう。レバーを引いて光の矢を放つアローショットが炸裂していく。しかしバラディアンはデスマボースに適さない質自体が異なる存在である。そのため長時間デスマボースの世界でその存在を維持することが非常に難しい。ゼステイの活動時間に限界が近づき、彼女の姿が透け始める。このままでは消滅してしまうだろう。ゼステイは地球へと撤退する。

ゼステイに続いて、ギルバリスも地球へと急接近。謎の宇宙人、シャグラス・ジャングラが赴いていた沖繩に向けて、ギルバリスは五体のギヤラクトンと数十体のバリスレイダーを送り込む。レイティングガンで放たれた弾丸を彼の愛刀「蛇心剣」で弾き躲すジャングラ。

「やれやれ。そんなに俺を休ませたくないってか」

シャグラスジャングラは単独で戦いを挑む。孤軍奮闘も虚しく、ギヤラクトンに追い詰められる彼の前に、かつてのライバルであったバードヒーロー、奈緒美オウジンブが駆けつける。

「ジャステイニーの連絡があつて駆け付けた。俺も手伝おう」

「仕方ねえ、手伝わせてやる」

二人の連携プレーは、ギヤラクトン達の敵ではなかった。バツタバツタと薙ぎ倒されていく。

遂に地球に降り立ったギルバリスの活動停止させるべく、ストレイジ代理隊長の結城真依の指示のもと、前回の戦いで特空機達が使用できる状態ではないため、唯一耐久性がダメージが少なかったウインダムに強化パーツを装着させた、ファイヤーウインダムを出動させる。ゼステイも神社近辺で体力を回復させながらアルファエッジ、ベータス

マッシュとなって戦闘を再会する。しかし、地上に降り立ったギルバリスは地の利を得たことでより強力な強さを誇る。超音波・バリスドミナーレを発してファイヤーウインダムの機能を狂わせ、破碎電磁ビーム・バリスデストルツをゼステイに浴びせる。戦士たちは劣勢に陥ってしまった。

『ハアッ!!』

そこに駆けつけたのは、バードヒーローとなった陸とジャステイニー。通称、陸ジャステイニーだ。陸を素体にジャステイニーと類似した姿。二人の掛け声は完全にシンクロし、文字通り一心同体となっている。絆の強さで進化するバードヒーローは、活動時間の制限を知らない。破碎電磁光弾・バリスチオーネを受けてもびくともしない。ギルバリスは悪足掻きにバリスグランデストルツを解き放ったが、リミッター解除された脅威的な力を我が物にする陸ジャステイニーのラストジャツジ・クレセントファイナルノヴァを受けて倒される。

「ゼステイ先輩の足を引っ張ってばかりでごさいます……」

「結局、俺は何も出来なかった……」

遥輝がステッグで駆けつけた時には戦いは既に終わっていた。己一人の力では無力感を感じたハルキとゼステイは自らの未熟さを痛感するのだった。

## 第七話 ヴェリガのライズソウル

「まったく、手間取らせやがって……」

ブルトンの異次元空間に閉じ込められていたレイヤノは、彼が幾千の戦いの中でオリジン・トライ・マインドを覚醒させて身に付けた超パワーの一つ、輝破の力を使う。輝破は時間を巻き戻すことのできる超弩級のラストジャッジ、トウウィンクルタイムドライバーを発動。ブルトンから脱出することに成功した。続いてレイヤノは自身の固有武器であるイージスボウとワイドアローを装備。放ったワイドアローは空間を歪め、ワームホームを作り出した。

「ゼステイの野郎、ハマしてなきや良いが」

レイヤノはデスマベースへと空間転移した。

ギルバリスがやられ、地球に平和は戻った。しかし、思うように活躍できなかつた己の実力不足から遥輝とゼステイは意気消沈していた。それを見兼ねた陸とジャステイニーはそれぞれの元に向かい、激励を送る。



「遥輝さん……でしたっけ？　大丈夫です。運命は、変えられますよ」

遥輝の元に向かった陸は自身の過去を語る。両親は産まれてすぐに亡くなってしまったこと。孤児で孤独だったこと。高校卒業後に出会った仲間達に支えられたこと。人は一人では生きていけないこと。しかしみんなと共に前を進んでいけばどんな困難でも乗り越えられること。そして、共に前を向いて進んでいくことができること。

「リツくん先輩のその、仲間ってどんな人達だったんですか」

「いつも僕の影に隠れてる恥ずかしがり屋だけど、優しくて機械弄りが得意な相棒。しっかり者で口うるさいけど、刀剣を振るうなら誰にも負けない親友。機械的で少しお茶目な一面もあるけど、とても賢い召使いさん。よくドジって僕を甘やかしてばかりだけど、頼れるお姉さん。無口で何考えてるかわからないけど、強くて真面目な先輩。気弱で平凡なサラリーマンだけど、守るべきものの為なら誰よりも必死なお店のお得意さま。みんな大切な仲間で、そして家族だ」

「そっか……なんか、良いですね。仲間」

「遥輝さんにもいるんじゃないですか。自分を支えてくれる仲間」

「そうですね。でも、あくまで職場仲間っていうか」

「今はそうかもしれませんが。でも、きつと見わかりますよ。遥輝さん、あなたは一人じゃない。だからまずは動きましょう。ジッーとしてでも、ドーにもならないですからね

「！」

「……押忍！」

ゼステイの元に向かったジャステイニーは自身の過去を語る。

「私の父親はヴェリガ。そして私は模造品のバラディアン。ヒーローでも、正義でもない。とても過酷な運命だったよ。しかし、私は諦めなかった。私を救い出したとあるヒーローが優しく囁いた言葉が、この胸に深く刻まれていたからだ。『この大地にしっかりと足をつけて立て。そしてどんな困難な状態にあつても、絶対に再びまた立ち上がれ。』と。だから私はこうして運命を変えることができた」

「なるほど……でもどうしてジャステイニー先輩はそんなに強いんですか」

「覚悟を決めたからだ。ゼステイ、君はもつと強くなれる。燃やした勇氣と衝撃を見せつけろ。そして宇宙中の希望を守り続け、先人達の願いを繋いで行くんだ」

「ウルトラ有難いお言葉だ。励みになります、ジャステイニー先輩!!」

激励を受けて立ち直った遥輝とゼステイ。合流した四人だったが、そこに突然現れたバリスレイダーに襲われ、陸は捕まってしまう。ジャステイニーはバーンドヒーローとなつた際に陸と融合している。そのため、普段は依り代や他の存在とコミュニケーションを取るには、投影状態となる必要があるのだ。故に、バラディアンである彼女は神社がない場所であつても、ある程度の距離ならば先程のように離れる事もできたわけなの

だ。がしかし、いずれも限度がある。彼女も陸に引つ張られる形で同時に連れ去られてしまった。

「ぐっ……誰だ、お前は！」

「——キエテ、カレカレータ」

陸を拘束した者の正体は鎬木慎也であった。投影状態が強まったジャステイニーを鎬木が視認することは難しい。しかし、陸の体はもう普通の人間ではない。彼ももう超人である。鎬木は陸の血液からヴェリガの因子を採取。更にそれを特殊な技術で加工して抜き取り、新たなライズソウルを生成する。

「そこまでだ！ リックくん先輩を解放しろ!!」

陸とジャステイニーの救出に向かった遥輝。鎬木は顔を見られる前に手を打っておいたバリスレイダーを従えて足止めさせる。遥輝は装備していた20式レーザー小銃を片手にバリスレイダーを撃退していく。陸を助け出すことには成功するものの、鎬木は既に姿を消してしまっていた。

「ヴェリガ、髑髏怪獣、古代怪獣、宇宙怪獣、異次元超人、宇宙恐竜、宇宙ロボット……」

鎬木が作り出した怪獣や異星人の力を宿したメダルのようなアイテム・モンスソウルを鎬木はバラディアンから強奪したライズライザーZに次々と装填する。それぞれの組み合わせにヴェリガのライズソウルを混ぜ合わせることで、強力なヴェリガ融合獣へ

フュージョンライズ  
と合 身させていく。

『ギャグオオオ!!!』

『ギイビィイイー!!!』

『ピロログワシ……』

スカルゴモラ、サンダーキラー、ペダニウムゼットンが誕生してしまった。怪獣達は進撃を開始し、遥輝の前に立ち塞がる。

「……は俺が!」

ゼステイも駆け付けろるが、圧倒的な戦力差の前に、歯が立たない。

「私達も行こう、陸」

「うん! ユーゴー、」

陸はジャステイニーに拳を突き出す。

「アイゴー、」

ジャステイニーも拳を合わせてグータツチする。二人は叫ぶ。

『ヒアウイーゴー! インティグレート……!!』

陸とジャステイニーは融合し、バードヒーロー・陸ジャステイニーとなる。

「あれが……」

「バード、ヒーロー」

陸ジャステイニーの登場に、ゼステイと遥輝は息を呑む。陸ジャステイニーが戦闘に加わったことにより、ようやく三大怪獣に立ち向かえるようにはなった。しかし、それでも相手はヴェリガの因子を持つ怪獣だ。ヴェリガ融合獣軍団の進撃に、二人は徐々に窮地に立たたさされるいていく。

『このままじゃ……』

「負ける——!!」

そこにもう一人のバードヒーローが現れる。

『おいおい、ゼステイ！俺の弟子を名乗るなら、もうちよい根性見せやがれ!!』

新たに現れたバードヒーローがヴェリガ融合獣達を薙ぎ払う。

「レイヤノ師匠!？」

実はレイヤノは、第四次デスマストラグルの開戦間近に出逢った彼女当人の選ばれし者である伊賀望いがもち・蘭らんと同化しており、バードヒーロー・蘭レイヤノとなって融合していた。ゼステイを指導するべく、一時的に蘭と分離してオリトバースに渡っていたわけだったのだ。

『久しぶりだね。蘭さん』

蘭と陸は顔馴染みであった。それもそのはず、彼は陸にとっての大切な仲間であり、家族である一人なのだ。

『陸くん！ 君も覚醒したんだね』

『はい。共に戦いましょう！』

蘭の意識はレイヤノのものに切り替わる。

『よし。ジャステイニー、ゼステイ、見せてやろうぜ。俺たちの快進撃を!!』

こうして二人のバードヒーローとゼステイ、そして遥輝がヴェリガ融合獣たちに勝負を挑む。ゼステイはベータスマッシュに、蘭レイヤノはパワーと火力に優れた形態、燃力の姿になる。

『ギャグオオオ!!』

スカルゴモラは足踏みとともに強力な振動波を伴う高熱の火炎弾・シヨッキングヘルボールで二人を爆撃。しかしそれをもろともせず爆発の中から飛び出したゼステイのベータラリアットが決まる。スカルゴモラも負け時と角から破壊振動・スカル超振動波で反撃しようとする。

『ガーネットバスター!!』

蘭レイヤノの強力な熱エネルギーパンチが先に炸裂。スカルゴモラが木っ端微塵に押し潰されて、そのまま爆散する。

『ギビィィー!!!』

サンダーキラーは陸ジャステイニーに尻尾を巻き付けて放電するサンダーテールを

浴びせる。

『僕たちは負けない!』

全身の装飾に施された金色のラインから電磁破滅光線・ストリームデトネーションを解き放つて尻尾の機能を麻痺、そして跡形もなく破壊する。

『ギイビィ………ビギィー!!!』

サンダーキラーは口から光刃・ライトニングキラーカッターを連射する。陸ジャステイニーはレッキンググクローで全て防ぐ。

『ギガスラスト!!』

一気にサンダーキラーを貫き、絶命させる。

『ピロログワシ……』

残された最後の一体、ペダニウムゼットンは瞬間移動しながら胸部から破壊光線・ペダニウムメテオでバインドヒーロー達を砲撃する。

『ゼットアイスアロー!!』

アルファエッジになったゼステイがエンシエスピアローから巨大な氷の矢を発射。ペダニウムゼットンは身動きを封じ込められ、凍結する。

『今です、師匠!!』

『おう!』

蘭レイヤノはスピードや治癒、超能力に優れた形態である慈魔の姿に変化する。

『レボリウムスマッシュ』

ペダニウムゼットンに手をかざし、強力な衝撃波を放って天高く吹き飛ばす。そしてゼステイがラストジャッジ・ゼステイウムメーカーを発射。ペダニウムゼットンの機能は停止された。

怪獣達が倒れ、バードヒーローが街中に並び立つ。その遠景を見ていた鎬木は、回収したギヤラクトロンMK2とギルパリスのモンズソウルを手に握りしめていた。彼は不気味にほくそ笑んだ。

こうして戦いが終わった。しかしジャステイニーは任務でこれからすぐに別の戦いに向かわなければならない。

「ごめん、僕も行きたいところだけど……」

「リク!! 探したよ、どこにいったの?」

異星人であり、陸の相棒であるペガが陸の元にやってくる。

「今の僕には家族がいます。僕はまだ戦いには出向けません」

「分かった。陸、君の覚悟が出来たその時まで、私は暫くオリトバースに戻ろうと思う」

「うん。準備が出来たら必ず呼ぶよ」

こうして陸とジャステイニーは分裂した。



「なら、コイツを使いな」

蘭レイヤノはジャステイニーに特殊なワードスーツを渡す。

「これは……？」

「ギヤラクシーライジングスーツ。コイツを着てれば、デスマバースでも少しな戦えるぜ。最も、本来持つ能力は上手く発揮できないかもしれないがな」

「ありがとう、レイヤノ」

ギヤラクシーライジングスーツを装着したジャステイニーは陸、ゼステイ、蘭レイヤノと別れる。別れ際にゼステイに選ばれし者を探し出し、バーンドヒーローになると、地球での陰謀に立ち向かうことをジャステイニーと約束した。こうして、ジャステイニーは宇宙へと飛び立った。

また、蘭レイヤノはまだ未熟なゼステイをほつといて次の任務に行く訳には行かなかったため、もう暫くだけ地球に居残ることに決めた。

「ほう。面白い。精々俺の計画の上で踊ってもらうぜ、バラディアンども」

休養から帰還した蛇倉隊長は一連の様子を眺めて、怪しく独り言を呟いた。

## 第八話 神秘なる強さ

蘭レイヤノはゼステイのジュゼーレタイマー・エネルギーの中に封じ込められているゲネガークの状態を解析している。

「なるほどな。こいつ、ジュゼーレフラグメンツを体内に飲み込んでしまってやがるぜ」

「なっ！ 道理で地球に着いた時、妙にゲネガーク殿は凶暴化していた訳だったのでありますね！」

「ああ。恐らくジュゼーレフラグメンツに侵されていた地球怪獣の死骸でも食らいつついて見事に感染しちゃった。つてところが原因だろうな」

「ぐっ……辛抱させましたな。師匠、どうしたらゲネガーク殿をなんとかできましようか？」

ゼステイはゲネガークをジュゼーレタイマーから召喚して蘭レイヤノに見せる。

「俺に任せとけ。慈魔の力で治してやる」

姿を変えた蘭レイヤノはフルムーンウェブを使用する。ゲネガークを浄化作用のある泡に包み込んだ。するとゲネガークの目の色は赤から黒に戻り、沈静化して大人し

くなくなった。

「よし、これで守護快獣の方は解決したな。次は、お前だな」

蘭レイヤノはゼステイに新たに三枚のライズソウルに渡した。

「俺がお前を鍛え上げて、このライズソウルを解放させてやるってことさ」

「つまり、特訓でございませぬ」

「ああ、この力を使いこなすには神祕の絆に迫る必要がある。準備は良いか、ゼステイ」

「勿論で御座います！ 勝負だ、師匠!!」

蘭レイヤノは燃力や慈魔の姿になりながら修行を施す。対するゼステイもアルファエッジ、ベータスマッシュに変化して立ち向かう。

一方、遥輝はストレイジの仲間たちと共に、第四次デスマストラグルの混乱に乗じて地球に訪れたピット星人のファとシィを確保した。地球に潜む何者かと怪獣細胞の違法取引をしたためだ。しかし、逮捕した時には既に手遅れであり、その何者かの手に渡っていたのだ。

怪獣細胞をピット星人から手にした存在——鎬木はそれらを怪獣メダル製造機・メダलगッチャーに投入してモンソソウルに変換。ゴルザ、メルバ、超コツヴの力を模している。

「超古代獣、超古代竜、宇宙戦闘獣……」

ライズライザーZにメダルを装填し、合体怪獣トライキングを新たに生成、鎬木も自ら乗り移って破壊活動を始める。

遥輝が搭乗するセブンガーと、洋子を操縦するウインダムが現場に急行する。

「力を合わせて倒してやりましょう！ 洋子先輩!!」

「当然よ!!」

頭部から放つメルバの怪光線、腹部から発射する超コツヴの破壊光線、額から出すゴルザの超破壊音波光線。トライキングは三つの怪獣の力をフルに活かした攻撃を次々と仕掛けてくる。

『ギィイヤオオ!!』

華麗に回避し、前面からはセブンガーの硬芯鉄拳弾が、背後からはウインダムのレーザーショットを浴びるトライキング。そのままセブンガーとウインダムの連携プレーが炸裂していき、トライキングを撃退することに成功した。

「どうだ! ……これが仲間の力。みんなで協力すれば怪獣だって倒せるんだ。俺、やりましたよ、リツくん先輩」

仲間という存在の必要さに気付き、共に力を合わせることで少し成長することができた遥輝は、それまで抱いていた悩みが解消され、晴れた心になっていた。

「奇獣、宇宙海獣……」

トライキングが敗れ、追い詰められた鏑木は更に所持していたガンQ、レイキュバスのモンストウルを使用。トライキングから強化された超合体怪獣ファイブキングを新たに生成。再度乗り移った。新たに右手のレイキュバスの冷凍光線と左手のガンQの吸収能力と衝撃波動で特空機が立ち去った夜の街を進撃する。

「スティア先輩、ミマクト先輩、フォト先輩。今こそ私めに力を貸してくれ!!」

特訓を乗り越え、遥輝からの連絡で現場に駆け付けてきたゼスティは、蘭レイヤノに託されたライズソウルを解放させた。先輩と敬愛したライズソウルを、ゼスティはライズライザー乙に装填する。

「ご唱和お願いします、我の名前を!」

ゼスティは先輩達が持つ神秘の光を受け継いだ新形態、ガンマフューチャーに姿を変えた。ガンマフューチャーは無数の幻惑を駆使し、トリッキーな戦法を得意とする超能力を使いこなすことができる神秘の戦士なのだ。

『ギィイヤオオゲエファイファイ……!!』

ファイブキングは各怪獣の飛び道具を一斉に発射するカタストロフィスパークでゼスティを一気に殲滅しようとする勝負に出る。

「ガンマスルー!」

パチンと指を鳴らす音。作り出した魔法陣を通って空間をすり抜け、ゼステイは必殺技を回避していたのだ。

「ガンマフリーザー!!」

ファイブキングの頭上に冷凍光線を放ち、猛烈な冷気で凍結させる。続いてガンマリダクション。体をマイクロに縮小してファイブキングの皮膜から体内に侵入。そのままゼステイウムエネルギーを鞭状に変形させたゼステイウムドライブを両腕から振り回してファイブキングを内部から粉砕していく。再生不能にまで持ち込んでからゼステイは再度ガンマスルーを使用して体内から脱出。ファイブキングは木端微塵に吹き飛んだ。

「……!?!」

「その格好、怪研に寄生中ってわけか」

驚いた鍬木は一目散に走り出して逃げ帰った。ジャングラは自らの攻撃によって鍬木あ落としたモンスソウルを拾う。

「ほう、これがヴェリガのモンスソウルか」

ジャングラは地球防衛軍で怪しい動きをする存在に気付いたようだ。

「……!?!」

「その格好、怪研に寄生中ってわけか」

驚いた鍬木は一目散に走り出して逃げ帰った。ジャングラは自らの攻撃によって鍬木あ落としたモンスソウルを拾う。

「ほう、これがヴェリガのモンスソウルか」

ジャングラは地球防衛軍で怪しい動きをする存在に気付いたようだ。

ガンマフューチャーを使いこなしたゼステイを見た蘭レイヤノ。無事に特訓の成果が出たようで一安心する。ゼステイの肩をポンと叩いた。

「これならこの地球はお前やストレイジに任せられそうだな」

「ありがとうございます、師匠！」

「ストレイジの仲間達と絆を結び、ゼステイ。それがお前のバインドヒーローへと覚醒の近道となるだろう。後は任せるぜ」

「了解です！」

レイヤノはワイドアローを放って空間を歪めてワームホールを作り出す。こうしてゼステイの師匠は颯爽と次の任務へと向かっていったのだった。